

タテカン「アカン」？

中日新聞 5月3日特報「京大名物 立て看板は邪魔ですか」。リード—京都大の名物、キャンパス（京都市）前に並ぶ立て看板（タテカン）を撤去すると、大学当局が学生側に通告した。京都らしい景観を守るという条例を持つ同市の指導に従ったためだ。しかし、京大のタテカンには数十年の歴史がある。学生の反発は強く、1日に大学が通告書を貼った時には、一部の学生ともみ合いになった。憲法が認める表現の自由などに触れかねない面もある。京大周辺を歩き、看板の撤去と憲法について考えた。



後半の一部を紹介—かつては京大に限らず多くの大学にタテカンがあった。それが、いつのまにかなくなった。「こうなるのは予想がついていた」。大阪府立大の酒井隆史教授（社会思想）は京大のタテカン問題をこう受け止める。酒井教授は「1980年代までは残っていた大学の自治という感覚が、90年代から2000年代前半にかけて、どんどん大学当局による管理強化の影響を受けて、なくなっていった」と指摘する。

上智大の中野晃一教授（比較政治）は管理強化の分岐点に04年を挙げる。国立大学が法人化され、とりわけ国立大に対する国の統制が強まっているのだという。さらに最近では、社会環境も厳しくなった。自民党の国会議員が安保法制や共謀罪に反対した大学教員の名前を挙げ、「偏向学者に国の科学研究費が使われている」などとインターネット上で発信した。大学では本来、世間で異端とされるような考え方さえ議論し、新たな理論や思考を生み出すことが求められている。しかし、こういったことが影響し、「大学からの意見発信が萎縮する恐れがある」と中野教授は心配する。なぜ、大学が狙われるのか。中野教授は「改憲のスケジュールを本格的に進めるときに、邪魔になるのは報道機関や大学教授、学生らから上がる反対の議論だろう」とみる。すると、京大のタテカンは、単純に景観の問題にとどまらない。「政権にとっての雑音を抑え込む上で表面化した、統制の一場面かもしれない」と中野教授は心配する。

タテカンについては、私なりの「思い」がある。信州大学で「青春時代」を送った頃、タテカンはごく普通の風景だった。今は大学から政治的なタテカンは消えてしまった。大学の管理強化だけでなく、学生が様変わりしたことも影響している。「意見発信」のツールとして、タテカンのある大学キャンパスの再現を期待してみたいのだが。

(2018年5月14日)